

ざしき童子のはなし

宮沢賢治

青空文庫

ぼくらの方の、ざしき童子ぼっこのはなしです。

あかるいひるま、みんなが山へはたらきに出て、こどもがふたり、庭にわであそんでおりました。大きな家にだれもおりませんでしたから、そこらはしんとしています。

ところが家の、どこかのざしきで、ざわっざわつと箒ほうきの音がしたのです。

ふたりのこどもは、おたがい肩かたにしつかりと手を組みあつて、こつそり行つてみましたが、どのざしきにもたれもいず、刀かたなの箱はこもひつそりとして、かきねの檜ひのきが、いよいよ青く見えるきり、た

れもどこにもいませんでした。

ざわつざわつと箒の音がきこえます。

とおくの百舌もずの声なのか、北きたかみ上川の瀬せの音か、どこかで豆まめを箕みにかけるのか、ふたりでいろいろ考えながら、だまって聴きいてみました。やっぱりどれでもないようでした。

たしかにどこかで、ざわつざわつと箒の音がきこえたのです。

も一どこつそり、ざしきをのぞいてみました。どのざしきにもたれもいず、ただお日さまの光ばかりそこらいちめん、あかるく降ふっております。

こんなのがざしき童子ぼっこです。

「大道めぐり、大道めぐり」

一生けん命めい、こう叫びながら、ちようど十人の子供らが、両りよう手をつないでまるくなり、ぐるぐるぐるぐる座敷ざしきのなかをまわつていました。どの子もみんな、そのうちのお振舞ふるまいによばれて来たのです。

ぐるぐるぐるぐる、まわつてあそんでおりました。

そしたらいつか、十一人になりました。

ひとりも知らない顔がなく、ひとりもおんなじ顔がなく、それでもやつぱり、どう数えても十一人だけおりました。そのふえた一人がぎしきぼつこなのだぞと、大人おとなが出て来て言いいました。

けれどもたれがふえたのか、とにかくみんな、自分だけは、ど

うしてもざしきぼっこでない、一生けん命眼を張って、きちん
とすわっております。

こんなのがざしきぼっこです。

それからまたこういうのです。

ある大きな本家では、いつも旧きゆうの八月のはじめに、如来にょらいさま
のおまつりで分家の子供らをよぶのでしたが、ある年その一人の
子が、はしかにかかってやすんでいました。

「如来さんの祭りまつへ行きたい。如来さんの祭りへ行きたい」と、
その子は寝ねていて、毎日毎日言いいました。

「祭りまつ延のばすから早くよくなれ」本家のおばあさんが見舞みまいに行

つて、その子の頭をなでて言いました。

その子は九月によくまりました。

そこでみんなはよばれました。ところがほかの子供らは、いままで祭りを延ばされたり、鉛なまりうさぎの兎を見舞いにとられたりしたので、なんともおもしろくなくてたまりませんでした。

「あいつのためにひどいめにあった。もう今日は来ても、どうしたってあそばないぞ」と約やくそく束くわしました。

「おお、来たぞ、来たぞ」みんながざしきであそんでいたとき、にわかさけに一人が叫びました。

「ようし、かくれろ」みんなは次のつぎ、小さなざしきへかけ込みました。

そしたらどうです。そのざしきのまん中に、今やつと来たばかりのはずの、あのはしかをやんだ子が、まるつきりやせて青ぎめて、泣きだしそうな顔をして、新しい熊くまのおもちやもちを持って、きちんとすわっていたのです。

「ざしきぼっこだ」一人が叫んでにげだしました。みんなもわあつとにげました。ざしきぼっこは泣きました。

こんなのがざしきぼっこです。

また、北きた上川かみの朗妙寺ろうみょうじの淵ふちの渡し守わたもりが、ある日わたしに言いました。

「旧きゅう曆れき八月十七日の晚ばん、おらは酒さけのんで早く寝ねた。おおい、

おおいと向^むこうで呼^よんだ。起^おきて小屋^{こや}から出てみたら、お月さま
 はちようどそらのてつぺんだ。おらは急^{いそ}いで舟^{ふね}だして、向^むこうの
 岸^{きし}に行^いつてみたらば、紋^{もんつき}付^{つき}を着^きて刀^{かたな}をさし、袴^{はかま}をはいたきれい
 な子供^{こども}だ。たつた一人で、白^{しろ}緒^おのぞうりもはいていた。渡^{わた}るか
 言^いつたら、たのむと言^いつた。子どもは乗^のつた。舟^{ふね}がまん中^{ちゆう}ごろに
 来^きたとき、おらは見^みないふりしてよく子供^{こども}を見た。きちんと膝^{ひざ}に
 手^てを置^おいて、そらを見^みながらすわっていた。

お前^{まへ}さん今^{いま}からどこへ行^いく、どこから来^きたつてきいたらば、子
 供^{こども}はかあいい声^{こゑ}で答^{こた}えた。その笹^{ささ}田^だのうち^{うち}にずいぶん^{ぶん}ながく
 たけれど、もうあきたから他^{ほか}へ行^いくよ。なぜあきたねつてきいた
 らば、子供^{こども}はだまつてわらつていた。どこへ行^いくねつてまたきい

たらば、更木さらきの齋藤さいとうへ行くよと言った。岸についたら子供はもういず、おらは小屋こやの入口にこしかけていた。夢ゆめだかなんだかわからない。けれどもきつと本当だ。それから笹田がおちぶれて、更木の齋藤では病気もすっかり直ったし、むすこも大学を終わったし、めきめき立派りっぱになったから」

こんなのがざしき童子ぼっこです。

青空文庫情報

底本：「セロ弾きのゴーシュ」角川文庫、角川書店

1957（昭和32）年11月15日初版発行

1967（昭和42）年4月5日10版発行

1993（平成5）年5月20日改版50版発行

初出：「月曜」

1926（大正15）年2月号

入力：土屋隆

校正：田中敬三

2008年3月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ざしき童子のはなし

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>